

途 上

平成29年7月14日（木）No.4

「土をつくる」

～ 7月5日 副校長講話 ～

7月に入りました。

4月から「児童会テーマ、聴き合おう」を軸にして、話をしてきました。

今日は、そのことの根っこにあたる部分をお話したいと思います。

『たがやせ どじょうおじさん』の話からスタートです。

どじょうおじさん (おじさん)

旅から帰ってきたどじょうおじさんは、ふるさとの仲間にあえるのを楽しみにしていました。

ところが、ふるさとは仲間のドジョウも虫の仲間たちもいません。悲しんでいるどじょうおじさんに、家に帰ろうとした男の子が駆け寄ってきました。どじょうおじさんは語ります。「ここは、むかし、たんぼがあった、いきもんがいっぱいあったんや。とんぼ、かえる、ふな…そして、どじょう」

信じない男の子が帰ろうとするので、どじょうおじさんは土を耕し始めます。その一生懸命な姿を見ていた男の子も土を耕したくなりました。

たんぼづくりが始まりました。男の子も少しずつ、土になれていきます。そして、農家の方から苗をわけてもらい、苗を植えていきます。

しかし、大変なことがふたりを待っていたのです。のびのびと育ちやんが、土の栄養をとってしまい、稲が大きく育たなくなってしまうのです。さらに、小さい虫たちが、稲の葉をくいちらかしていました。

そのときです。とんぼとかまきりがやってきて、「俺たちに任せな」と、わるさをしていた虫たちをにらみました。

「おーい、おーい、仲間たちよ、かえってこーいーよ」

どじょうおじさんの声をきいたどじょう、ふな、かえるたちが帰ってきました。

「きれいな土と水で元気になるんや」

秋がやってきて、たくさんのお米がとれました

男の子は再び、土を耕し始めました。

さて、『たがやせ どじょうおじさん』のお話をしてきましたが、これに似たお話があります。これは、実際にあった出来事です。

青森県の弘前というところで、無農薬でりんご栽培を始めた人がいました。木村秋則（きむらあきのり）さんという方です。

しかし、なかなか、思うように、りんご栽培ができず、家の暮らしはどんどん貧しくなっていました。

木村さんは、もうあきらめようと山の中に歩いて行ったときのことでした。

そこで見た土… そのときのことを木村さんはこう語っています。「まず土だ、この土をつくろうと決めたんです」「そう、このにおい、このにおいの土、いいにおいだ。この土には虫がいない。びっくりした。これが私を続けてリンゴ栽培をしようと決定させたんです」と。



* * * * *

これは、6年1組が大池と向き合う中で、学級訪問をして出会っていった他の学年との心の通い合い、そして、今、まさにそこにいる 生きている私たちのドラマです。

これは、6月30日の6学年だよりを読んだ私が、感動し、ここに掲載するものです。

「ぼくたちにできることはないか」という5年2組。

「6年生が卒業したら、今度は僕たちが守る」という

3年1組の言葉。

「うれしい」とHさん。

あたたかな空気が教室の中に広がっていきました。

そして、池の周りに置かれた看板には、こう書いてありました。



大池を封鎖させてください

私たちに残された時はあと数ヶ月です。とってもしっかり取り切れないゴミを残りの数ヶ月でとることはできません。申し訳ございません。

全校のみなさんと約束します。残りの数ヶ月できれいな大池を取り戻します。私たちに時間をください。

こうした本気さをもってとりくんでいる6年生に心がふるえました。私たちがこの学校で過ごすっていったいどういうことなんだろう。ひとつひとつがどんなに素晴らしい力をもっていても、根を張る土がなければ、花は咲きません。

みんなが育つための土って
どんな土だろう

どんな土ができれば
みんなは大きく育つのだろう

終わります。